

---

# とある愚者の

デュランダル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
とある患者の

【Nコード】  
N5832X

【作者名】  
デュランダル

【あらすじ】  
俺はようやく死ねた。これで俺が犯した罪を償うことができると思っていた。地獄でも煉獄でもいくつもりだった。しかし俺は神に転生しろといわれた。ありえないしするつもりもなかった、だからはじめは断っていたがある映像を見せられた俺は……。正直言って駄作になります。作者の妄想全開です。投稿も、不定期になります。

## プロローグ 1

「くそ、ここはどこだ」

俺は、目覚めるとまわりお見ていった。周りはすべて白い世界に包まれていた。何も存在さえしていないようにも思えた。

「そうだよ。我ら神々しか存在し得ない世界なのだから。いや、違うか。正確には、死者か君たちが思っている悪魔や天使たちも存在できる世界だよ」と爺さんが現れて説明してくれた。

「その説明だと俺は死んだらしいな。ま、そんなことどうでもいい。どうせ、俺は地獄か煉獄<sup>コキユトス</sup>だろ。何なら地獄の最下層でも落としてくれよ」

俺は、その神と名乗る爺さんにせせ笑うかのようにいった。

「おぬしはよく、神話をしっているようだな。ま、そうやって、自分を中傷せんでいい。むしろ、といゆより、わしは君に第二の人生を歩んで欲しいのじゃ」

「何で、俺なんかに新しい人生なんかくれるんだ。俺は最悪の屑<sup>さいやくのクズ</sup>だぜ。こんな俺なんかに、新しい人生を与えるぐらいなら、もっとまじな善人野郎に与えたほうがましだぜ。俺は、はっきり言って悪を肯定するぜ。」

俺は神に対して、吐き捨てるように言った。その態度に対して、大いに満足しながら頷いてこう言った。

「そんな、君だからこそ新しい人生与えようと思っただよ。君の二十年間の記憶とわしの長年見てきた死者たちの過去と意思をだよ」  
「なら、分かるだろ俺がいったい何をしてきたかお。くそみたいな世界にいて死んでしまったんだからな。俺は別に生きることにはたいして未練も何もない。しかし、どうして俺なんか選んだ。それについて、俺が納得する回答が得られたら俺はあんたに従うぜ」

俺は、自分が今考えている本心の言った。

「それは、初めは別に君じゃなくても良かった。たまに、転生やら

別人にして同じ世界に戻るのがわしらが作った規則きまりみたいなものな  
じゃ。だから、ワシらはある程度の善人なら誰でのいいのじゃ。た  
だ、ある転生者に頼まれたんだよ。お前さんに新しい人生を与えて  
くれ。私の分がなくなってもいい、何なら地獄に落としてもいいか  
ら、彼に与えてくれとな。ワシは、この規則きまりやり続けて初めてのこ  
とだった。そして、ワシはそのときたいそう驚いてな、こう約束し  
たんじゃ。お前さんが死んだとき、新しい命授けると。ほれ、証拠  
の映像を見せてやる。」

突如、俺の頭に映像が流れた。俺が一番守りたかった人。そして一  
番守れなかった人。十年前、あのときのままの姿で現れた。俺はそ  
れを見て何か頬を伝うのを感じた。触れてみると濡れていた。俺は  
そのとき初めて涙だと気づいた。ここ、十年も流していなかった、  
涙だった。俺は、それに気づくと泣き崩れた。彼女の声、表情、仕  
草、そして癖、何一つ記憶と変わりなかった。俺はそれに対して、  
笑顔で子供のように泣いていた。

「その様子だと、信じてもらえたようじゃな。これを踏まえてもう  
一度聞く」

髪は一拍開けてこういった。

「お前は、ここで新しい人生を歩みかそれとも手放すか。さあ、ど  
ちらを選ぶ」

## プロローグ2

俺はこの映像を見せられて答える事ができたのは一つしかない。

「いいだろう。喜んであなたのいうとうりにしよう」

その答えを聞くと神は満面の笑顔だった。俺はそれに対して疑問に思ったがあの映像を見せてもらったのでスルーした。

「いやー、こんなに早く決めてくれるとはワシとしてもありがたい。かなり、理屈屋だから説得するには時間がかかるでしょうねっと言つてたけども証拠を見せるだけで信じてもらえたのは良かった。で、お前さんはどこに転生したい？」

「彼女が行った世界」「無理だ」

俺は迷わずこう即答したが、神は予想していたように即答で返された。

「原則として同じときに来た者ならいいんじゃないが、間が空きすぎている者には転生者がいる世界にはいけないようになってる。これは、どんなことをしようと覆らん」

おれは、神の顔が真剣そのものだったのと瞳に揺らぎがなかったの  
で信じた。大体の人間は目を見ればどんな些細な嘘でも微かに瞳が  
揺らぐ、神も人間と同じ感情豊かなら瞳で分かると仮説を立てて俺  
は納得した。

「なら、どのくらいの期間が駄目なのか教えてくれ。それを教えて  
くれないければ納得できない」

俺は、少し殺気を出しながら笑顔で言った。昔からこういうやり方  
には慣れていた。

しかし、神は飄々とした態度で答えた。

「大体2、3年でとこのかー」

「なら、仕方がない。そうだな・・・、元の世界はだめなのか？」  
と質問すると即答で「だめじゃ」といわれた。

「おい、神、<sup>マジイ</sup>どんな世界ならいいんだ？」と質問するとこんな答え

が返ってきた。

「そうじゃのう、さっきの2つ以外なら何でもいいのじゃ。アニメだろうとドラマだろうとな。多くの連中はアニメの世界に行くがのう。お前さんは興味がないだろう」

「ああ、そんなことよりもいろいろやることもあつたから興味がないな。でも、行くのにはそれでもいいか」と俺は途中からめんどくさくなつたのでそれでもいいやと思つた。

「なら、とある魔術の禁書目録でいいか？わしん所来た連中の中で一番行きたいと言つていたアニメの名前だ」

「なら、それでいい。しかし、原作があるならその知識が欲しいな。なあ、神原作シジイの知識を与えてくれないか」と頼んで見るとあっさりくれた。

「へえー、これは超能力と魔術が折り重なる世界か、結構面白そうだが悲劇が多いなこの街には」と与えられた知識を見ていと神が俺にあることを伝えた。

「あと、お前さんが頼める願いは5つじゃ」

「それは、どんな願いえもかなえられるのか」と俺はその言葉を聴いて興奮した。

「ま、さっきの2つのことに関連すること以外ならなんでもいいのじゃ」

俺はそれを聞いて、頭で高速に考えた。これなら、俺の手で悲劇を殺せるかもしれない。腐つた世界を変えられるかもしれないと思つた。「行つた世界ではどんなことをしてもいいんだな」と俺は確認をした。

「いいんじゃないよ」

「なら、1つ目に超能力は自虐食ダメージイーターい自分の体に受けた能力、魔術を自分の物にする、魔術は悪魔工房能力を持った悪魔を呼び出すことができる。

そして二つ目は俺の転生は赤ん坊からにしてくれ。もちろん、孤児としてそしてある研究所、そうだな諜報と暗殺といろんな国のコネ

や弱みを握っているあるところで学園都市以外にしてくれ。ついでに肉体改造もしているところで。

2つ目は元の体をベースに肉体を即死級でも30秒は持つ体とリミッターが外れる体は肉体改造された跡でいいが、それを頼む。

3つ目は容姿はそのままでもいいが、瞳は赤と黒に、髪は銀にしてくれ。

4つ目は脳の演算能力スペックは10万人にしといてくれ。

5つ目は、魔道具の製作技術とそれを収納することのできる鍵。魔道具は想像でかたどれた能力とその世界で集めることのできる材質で作れるのと設計図が思い浮かぶようにすること。

あと、これはお願いなんだが全部のアニメや漫画、小説の物語を俺の記憶の中に記憶させといて欲しい。これは、実現できるか?」自分で無茶なこと言ってるし、妄想全開だなと思いついて待っているとおつさりと「べつにいかまわん」といわれた。

「しかし、その悪魔工房イービルファクトリーは制限かけんといかん」

「それなら、最高5体までとしましょう。そして、なにか媒体がないと使えない魔術にしましょう」

俺は、はじめっからそのつもりだったのでわざと制限を言わず後でいゆことで条件を軽くした。

「ま、それぐらいならいいじゃろう。付け足すとすればお前さんの人生にその魔術を使える一族に会うようにしないといけない。それはこつちですからこの条件で転生をしてくれんか?」

「ここまでしてくれたんならいいぜ。転生には多少の不満があるが彼女の願いを聞いてくれたから従う」

「なら行って来い、岩井神樹いわいしんじゆ」と髪が笑顔で言った。そのとき下から穴みたいなものが現れた。

「ああ、行ってくる。そして、あいがとうな神シンジイ」と、俺は笑顔で言った。そして、落ちていった。最後に神の顔が何とか見えた、とても驚いたのか驚愕の顔をしていた。

心に底から笑顔を出したのはあの時以来だなと思いつながら落ちてい

つ  
た。



## プロローグ2（後書き）

後書き 本当の絶望と狂気を知っている主人公はとあるの世界で何をなすのかという作品です。

主人公の名前は友人の名前です、ちゃんと許可は取っています。次はオリキャラのキャラ設定です。

## 主人公設定

主人公

岩井神樹  
いわいこうき

身長

170cm（17歳）

体重

70kg（17歳）

容姿

元々がコードギアスのルルーシュ似で、赤と黒のオッドアイ、髪は銀色（肉体操作により変えられる）

性格

転生前は感情がほとんどなかった、そのときに応じた感情表現を出していた。転生後は自分が面白いと思ったことに手を出している。しかし、根本的なところは変わっておらず、自分が守りたいもの、仲間だと認めたものには自分の命を差し出しても助ける。

能力・魔術

ダメージイーター  
自虐食い

自分が受けた能力・魔術を解析・逆算し自分の能力にする。

条件

肉体でなければならぬ。使う力の強さによって激痛が走る

イービルファクトリー  
悪魔工房

神話に出てくる悪魔や神、ドラゴン、幻獣を呼び出すことができる。

条件

媒体として紙でなければならない。紙に名前、容姿、能力を書き、呼び出すのに名前を言わなければならない。使うことに50mlの血液を使う。他人の血でも可能で一日中空気にふれていなければ可能。

魔道具

????

以後順次更新

## 転生先は5歳の体！？

俺は、目を覚ますと暗闇だった。正確には、目が何かに覆われていた。昔、着けられたことがある拘束具だろう。体にも拘束具が着けられていた。かなり頑丈そうだった。記憶を見ると、俺は体を少し動かして骨格と筋肉のつき方を調べると大体五歳の俺の体と同じつき方をしていた。薬と過酷な訓練、拷問的な痛めつけを受けていたころの体とおなじだった。それはある意味でありたいが、俺は心の中で思った。

「あの神<sup>ミジイ</sup>今度会ったときは確実に拷問にかけてやる。こんなミスができないように刷り込ましてやる」

俺はその思ったことに対して笑った。おかしいと思ったからだ。

(こんな感情を思い浮かべるのはあの時以来だな)

俺は大笑いをしていた。すると突然、視界がはれて光が差し込んだ。そこには研究者共<sup>クスども</sup>がいた。近くには屈強な男がいた。体の肉の付き方を見る限りかなり強そうだ。手には拘束具の眼帯が持つてあったのでこいつが剥がしたのが分かる。研究者の大概連中は俺をモルモットのように見ていた。

一人だけ俺を不憫だと見ている20代の若い男がいた。俺はその視線に少し疑問に思ったが研究者共<sup>クスども</sup>の会話が入ってきた(英語)。

「おい、どうするこいつが発狂してしまった。もう、モルモットは用意してないぞ」

「予備は用意してたが、確かスポンサーにあった臓器が出たからそっちに廻されて用意ができないかったんだっただな」

「嘆いてもしょうがない。少しデータ不足だが何とかいけるだろう」

「しかし、成長増進研究部はいいよな趣味で5歳の女の子を大人の体にして玩具おもちゃにしてるんだからうらやましいよな」

研究者共クズどもの会話はそんな感じだった。正し、若い研究員はその輪に入らず俺だけを見ていた。俺はそこまで聞くとさすがに沸点を超えました。

「こいつ等を最高の恐怖フレゼントを用意しないとイケないな」と思うと筋肉を限界まで強化すると拘束具を引き裂いた。しかし、屈強な男が抑えに来たがそいつの首を掴んで抉りつけた。抉った首の肉を研究者共クズどもに投げつける。それにより、研究者共が膠着し、それを狙った俺は若い研究者を残して全員殺した。それを見た、若い研究員は何か喜んでるように見えた。

「あなた、悲鳴を上げたり、気絶したり、助けを求めたりしないんだな？」

俺は平坦な声でそういった。しかし、若い研究員は歓喜に満ちたような声色で答えた。

「何を言ってるんだい。君も見ていただくこの研究者クズの会話。君たちを人間だと思ってるんだ。実験体とも思っていたならまだ良かったが、こいつらは男はモルモット、女は家畜としか思っていなかったんだぞ」

「なら、あなたはここで働いているんだから同類じゃないのか？」

「僕をあんなんと同類にしないでくれ。元々は普通に雇われ研究員さ。彼らとは毛色の違う研究員で武器を専門としてるんだ。人体系

とは違うんでね。僕としては才能ある子供をこんなばがげたことに使ってること自体怒りを感じるんだよ」

若い研究員は死体となった研究者共を足蹴りにしながら答えた。俺はその行動を見て本当にそうなんだろうと思った。何せ、顔のみを踏み潰していたから。

「なら協力してくれないか？」

俺は、さすがに一人ではすぐに見つかっているいろいろ損害を出しそうだと思ったから、彼を仲間に引き込もうと思った。俺の勘ではかなり変人で面白いことなら何でもするタイプだと思った。

「何をするつもりだい。脱走の手助けはしないよ。僕はまだ死にたくないし」と彼は、おどけながらそういった。俺はそれを聞いて残酷な笑顔でこういった。

「逃げる。そんなめんどくさいことはしない。何故なら・・・」と切るところ告げた。

「この研究じゃないのすべての研究者共を殺すからだ」

転生先は5歳の体！？（後書き）

後書き 睡魔線なんか中途半端で。今思いつく限りなので次いきま  
す。

感想・叱咤があればいくらでも受け付けます。

「何を言ってるんだい!? 無茶に決まってるだろ。ここにいる人の数分かつてるかい1万だよ1万。」

そのうち、研究員は3000人、警備関係の連中が5000人、そして、君たちのような人間が2000人だよ。しかも、15歳以上の人間がほとんどいないんだ。他にも、解剖やら改造やらで1/4は使えない。さあ、これだけでどうするのか、君は」と、笑いながら若い研究員は説明した。それには嫌味ではなく純粋な興味から来る笑いだ。こいつは俺がどうやって闘うのかを見たいんだな。この不適格要素が多すぎる中で。なら、簡単な作戦ならできてる。

「簡単さ。防衛システムがすべてメインコンピューターに制御されていること。隔壁があつてそれを壊すのに5分以上であるこつ。この条件さえクリアしていれば何とかできる」

「確かに、防衛システムはメインでほとんどやってるし、そこで隔壁収納もできる。でもこれだけでできるのかい?」と、疑問に思われた。ま、そうだろう。ふつうの・・・と思っていると、若い研究員は「あ、」といって納得したかのように自分の考えを言った。

「わかった。まさか、まずはメインコンピューターを制御化にし、その後、隔壁をあげて袋のねずみにしてから、殺るんだね」

「概ね正解、できればできるだけ殺さないようにする」



「どうして、今まで散々玩具おもちゃされてきたのに？」

「そんなの本当の拷問ご拷問を与えないといけないからね」

「そうなのか、よかった君に付いて。それじゃあ、メインコンピュータまでの道のりはどうするんだい？さすがに僕もすぐにはれることはしたくないんだよね」

若い研究員おどけたように言った。まるで道化師クラウンのようだ。

「大丈夫、それについてはもう、用意はしてある。この研究者共クスどもの中で無口な奴は誰だ？」と聞くと？を出してるような仕草をした。

「どうしてそんなこと聞くのかい？まさか皮でも剥いで自分自身にでも着るつもりかい」

「それはどこの童謡だよ！？そんな、古典的なことはしない。もっと科学的な方法。ま、教えてくれたら実践するから」

「いいよ、どうやるかも見てみたいし」といって一人の研究者クスを指した。俺は指された研究者クスの死体を持つとその肉を食った。そう俺は人肉を食べた《……………》。

「まさか、人肉それを食べるとは驚きだね！？」と少し顔を引きつらせながら言った。

「こつしないと、情報《DNA》が入ってこないんだよ。血液だと2？必要だからこつちのほうがい早い」  
と俺は、死体の右腕の肉を食べきった。

そうすると俺の体がどんどん変形していきさつき食べた研究者と同じになった。それを見た若い研究者は驚いた。

「まさか、そんなことで肉体変化ができるなんて」

「それじゃあ、行きますか。クスどもへ最高の恐怖と絶望」という  
と思出したかのように俺は付け足した。

「そういえば、お前の名前を聞いてなかった？これから、なんとなく長い付き合いになりそうだから教えといてくれ」

「別にかまわないよ。僕の名前はパイアソ・ロコだよ。君の名前も決めとかないといけないな」

「そうだな、フル・ソリテュードではどうだ」

「いいんじゃないの、よろしく。フル」と手を差し伸べた。

「ああ、よろしくな。ロコ」と俺はそういつて握った。

すぐ2人は離すと扉を開いた。

そして、10時間後には研究所を占拠、一カ月後にはそのスポンサーを含め吸収、半年後には社長を影に置き会社を運営する。1年後には裏社会でも有名となる、フル・ソフテュードの名が

孤独の愚者へフル・ソフテュード」と狂気の道化師へパイアソ・ロコ」が手を

すいません。サブタイトルでネタバラししてしまいました。

この後の話は外伝へもち越しです。

次は、5年後のアレイスター・クロウリーとの初接触です。

乞うご期待

あと、感想などありましたらどんどん送ってください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5832x/>

---

とある愚者の

2011年10月19日06時23分発行